



明

治八年（一八七五）二月、文部省から一人のお雇い外国人が京都に派遣された。アントニウス・ヘルツ（A. J. C. Geers, 一八四三—一八八三）という。三二歳の薬学者であった。任務は京都に官立の「司薬場」（薬品検査所）を設置すること。ヘルツは明治九年（一八七六）九月、政府の方針で京都司薬場が廃止され、東京司薬場に転動した。一年八ヶ月の京都滞在中、ヘルツは業務のかたわら、明石博高が明治三年に設立した舎密局で理化学講義を担当し、明石ら京都府吏員や京都の知識層との交流を深めた。

明治八年六月一日、舎密局での開講演説で、ヘルツはユトレヒト軍医学校の薬学生だった一九歳の頃から、関心を寄せ研究を重ねてきた日本文明への思いを込めた。演説ではまず、神武天皇以来の日本文明史を中国文明の受容史として概観し、「支那学」における「万有学」（理学）と「舎密学」（化学）の欠如を指摘する。ついで、江戸時代の学術にオランダが貢献した事例を次々に列挙した上で、ドイツ語・ドイツ医学を優先し始めた日本政府の動向に対抗して、現今のオランダは「医学ニ於ケル独乙ト差異アルニ非ス又未タ必シモ独乙ニ讓ラス恐ク其右ニ出シ心理学モ亦然リ」と述べ、京都を「日本国中学事ノ首府トナサン」との願いから「舎密学」を開講する、と宣言した。

明石とヘルツの交流を物語る貴重な資料が三点ある。稲亀鉦泉定性分析表版木、京都自然史博物館建築設計図、春和堂主人若林茂介（茂助）の明石あて納品書、の三点である。

第一の定性分析表版木は二人が、明治五年（一八七二）に見えられた笠置町上有市字稲亀の鉦泉を舎密局で分析した成果である。明石はすでに慶応三年から各地の鉦泉を訪れ、分析結果をもとに、ドイツ人エステレンの薬学書で成分の機能を調べていた。一方、ヘルツはユトレヒト軍医学校の化学教官時代に定量分析化学の教科書を出版していた。オランダ語原文と和文を対照させた一枚の版木は黒々と墨で汚れているが、二人の協力ぶりを彷彿とさせる。

ヘルツが作成した京都自然史博物館建築設計図二枚（京都国立博

明石博高とヘルツ

松田清

博物館所蔵、重要文化財）は旧仙洞御所に建築する博物館のために、ヘルツが明治八年に構想した最初のプランと思われる。一枚は二階建て寄棟造り。内部は仕切りのない広大な展示ギャラリー。両翼のファサード上部には、日本人博物学者として小野蘭山、飯沼慾齋の二名、オランダの日本研究を代表するシーボルトら博物学者六名の名前を掲げる。もう一枚の墨書き平面図は二番目に計画された自然史博物館の中央館内部を示す。明石の旧蔵品である。オランダ語の説明文も明石の筆かもしれない。観覧順路や管理室、準備室、陳列室など詳細に記載されている。

第三の資料。若林茂助の明石あて納品書は、筆者が一八九〇年、ライデンの国立植物標本館（Rijksherbarium）付属図書館（当時）において、ヘルツ旧蔵岩崎灌園著『草木育種』中に見いだしたもので、ヘルツの本草書蒐集に若林茂助と明石が協力していたことを物語る。残念ながら、現在、所在を確認できない。

ヘルツが明治二〇年（一八七七）にフランス語で著した自著『新撰本草綱目 第壹篇鉦物之部』（横浜、一八七八）の序文に、京都滞在中を回顧した次の一節がある。ヘルツの念頭に明石博高との日々が甦っていたであろう。若林茂助の面影も去来したかも知れない。

私以前にオランダ人は誰も任んだことのない古く京都、日本のローマで、私はとりわけ、この国の自然史に関する古今の和書に親しむ機会にしばしば恵まれた。そのうえ、地元で大変尊敬される実に親切的な幾人もの学者と知り合いになれたのは、欣快かつ有益なことであった。毎年この都市の旧御所で開催される博覧会のおかげで、さまざまな分野を細部に至るまで知ることができた。私の進言にしたがって、地元政府の幾人もの官吏が、古都に存在するこの国の国民史、産業、工芸、自然史に関する数多の貴重な資料を常設の博物館に収集し始めた。

参考文献

向井晃「お雇い外国人 A. J. C. ヘルツの『京都舎密局開業記』—舎密学開業式講演—」（東海大学紀要、課程資格教育センター、第二号、一九九二）。

